

飼育動物と人の生活がより密接になってきたため、以前に比べ、動物が中毒物質に遭遇する機会が増えているようです。動物病院で見られる中毒をいくつか紹介します。

まずはタマネギです。多くの人が大や猫に有害だとご存じのようですが、タマネギの成分の酸化作用により赤血球が破壊されて、貧血を起してしまいます。症状は血尿、歯茎や結膜が青白くなる、黄疸、呼吸が速くなる一などです。この中毒は個体によって感受性が異なるため、たくさん食べても大丈夫な場合もあれば、エキスを含んだものをなめただけでも起こることがあります。



高島獣医科病院長
(富山市黒崎)

高島 弘毅

メタルアルデヒドは、ナメクジやカタツムリの駆除剤に含まれる成分です。少量でも、とても重い症状が現れる恐れがあります。症状は、摂取後30分〜3時間以内に現れます。まずはけいれん発作が起こり、呼吸不全により2〜24時間以内に死に至ります。けいれんが治まっても、

動物の中毒



散歩ではペットが中毒物質を誤飲する恐れも。飼い主は十分な注意が必要だ—富山市

肝障害が起こって死する可能性があります。チョコレートは興奮、神経障害、嘔吐、口の渇き、下痢、利尿、不整脈などを引き起こします。チョコレートに含まれるテオブロミンやカフェインが原因です。一般にカカオの含有量が多い料理用などのチョコレートに、これらの成分が多く含まれます。

クマリン系殺鼠剤も要注意です。殺鼠剤の成分はいくつかありますが、クマリン系による中毒が小動物医療においてよく知られています。ワルファリンがクマリン系薬物の代表ですが、ジフェチアロールなどの新しいクマリン系薬物はより毒性が強いです。

クマリン系殺鼠剤は、血液を凝固させる因子を枯渇させるため、正常な止血機構を妨げてしまいます。症状は、2〜5日後に出血が起こり、食欲がなくなったり、歯茎や結膜が青白くなったりします。出血の起こる場所はさまざまで、皮下の内出血の場合もあれば、鼻の出血や血便、肺出血、胸や腹腔内出血の場合もあります。



チョコレートやタマネギ、殺鼠剤などは…。ペットの周りには危険物があふれている

により、毒物が摂取されてしまいます。まずは動物が接触、飲まない環境づくりが最も重要だと思いますが、万が一の場合は速やかにかかりつけの動物院に相談しましょう。

その際には、パッケージな摂取したものの情報があると速な治療に役立ちます。中毒物質かどうか分からないときはインターネットで情報を調べるも役立つでしょう。

「いつも一緒 富山のペットたち」は、毎月第一木曜日に掲載です。

接触・誤飲しない環境を

さまざまな工業用溶媒として用いられ、一部の保冷剤にも含まれています。甘味があるため、犬も猫も好んで口にすることがあります。

は意外と身近に多く存在します。そして毒となるものほとんどには解毒薬がありません。時には予想もしない動物の行動

症状は30分〜12時間以内に始まり、沈うつ、運動失調、頻呼吸、嘔吐、多尿などが現れます。1〜2日後には急性腎臓不全となり、死に至る場合が多いです。また、犬より猫の方が致死量は少なく、中毒に陥りやすいです。

このほかに、たばこや飼い主の内服薬(風邪薬、鎮痛剤、睡眠導入剤、心臓薬など)、観葉植物、金属、洗剤なども誤食が多々、中毒の原因となることがあります。

動物に対して毒性を持つ物質